

アルケイアー記録・情報・歴史  
第五号 二〇一一年三月 七七一―一二二頁  
南山大学史料室

モダニズム建築の保存と活用への一提言

伊藤真司

---

A Proposal for Conservation and Utilization of  
“Modernism Architecture”

ITO Shinji

*archeia: documents, information and history*

No.5 March, 2011 pp.77-112

Nanzan University Archives

## モダニズム建築の保存と活用への一提言

伊藤 真司

### はじめに

解体か、保存か。一九二〇年代から一九六〇年代までに竣工した日本の「モダニズム建築」<sup>①</sup>が、現在、岐路に立たされている。世界の中で見ると、日本は建築の保存に対する意識が低く、「建築の寿命が人のそれよりも短い」と言われている。<sup>②</sup>モダニズム建築の保存問題については、専門家が調査・研究する国際学術組織として「DOCOMOMO」(Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement)<sup>③</sup>が存在するということも日本ではあまり知られていない。「DOCOMOMO」の日本支部である「DOCOMOMO Japan」は、モダニズム建築絶滅の危機に警鐘を鳴らすべく、後世に残したい日本のモダニズム建築の傑作を選定したリスト、「DOCOMOMO 一〇〇選」(その後、順次追加され、現在は一四五選)を公表している。庁舎、学校、美術館、図書館等の公共建築、銀行やオフィス、教会、住宅まで、独自の視点で選定されたリストには、大学の建築も多く含まれている。東京女子大学(アントニン・レーモンド設計、一九二一年)、名古屋大学豊田講堂(横文彦設計、

一九六〇年)、明治大学和泉第二校舎(堀口捨巳設計、一九六〇年)、愛知県立芸術大学(吉村順三設計、一九七一年)、そして、南山大学(アントニン・レーモンド設計、一九六四年)、他にも多数の大学の建築が日本の誇るモダニズム建築の傑作として選ばれている。

大学においては、特に一九五〇年代後半から一九六〇年代にかけて造られたキャンパスに、再編の波が押し寄せている。バリアフリー化への適応、耐震強度不足の解消、最新のIT環境の整備、多様な授業スタイルへの対応等、解決すべき課題が山積みである。各大学の置かれている状況は様々であるが、キャンパス再編における共通の課題は、「少子化問題」である。少子化時代の生き残りをかけた経営改革の中で、老朽化した建物を維持していくためには多くのハードルがある。入試広報の観点においても、老朽化した建物は受験生たちにマイナスの印象を与える。受験生や保護者にとっては、最新の設備を備えた真新しい建物が魅力的なキャンパス・ライフそのものであり、各大学はそれをアピールすることに終始してきた。また、ファカルティ・デイベロップメント(FD)の一環として、近年各大学において実施されている学生による「授業評価」においても、「古い建物＝教室環境が悪い」というマイナス評価を受ける場合が多い。このように、大学の経営という観点では、建築の歴史的・文化的価値を評価し、保存のために投資していくことは難しい。大学において、モダニズム建築を保存していくには、多くの課題が存在するのである。そして、スクラップ・アンド・ビルドによるキャンパス整備を選択せざるを得ず、学生や地域の人たちに惜しまれつつ建物は姿を消していく。近年では、アントニン・レーモンドの初期の傑作とされる東京女子大学の東寮(一九二四年竣工)、前川國男による学習院大学・中央教室(通称「ピラミッド校舎」一九六〇年竣工)等、DOCUMENTO Japanにより保存運動が展開された末、解体されている。南山大学においては、二〇一一年度の南山短期大学の短期大学部化に向けたキャンパス整備の中で、レーモンド建築のひとつである大学会館(一九六四

年竣工、日本建築学会賞受賞作品）が取り壊され、現在、新しい教室棟（R棟）を建設しているところである。この先もスクラップ・アンド・ビルドによるキャンパス整備を続けていけば、将来の南山大学キャンパスにはレーモンド建築は何も残らないという結末となる。

本稿では、アントニン・レーモンドの設計による建築を南山大学が有する「建築ストック」<sup>4</sup>と捉え、キャンパス整備において活用するための施策を探る。キャンパスの中にモダニズム建築の傑作が存在していることを南山大学の強みと捉え、ブランディングプロジェクトのひとつとして、建築を「使い続ける」前提での保存・再生を提言することを目的とする。本稿は、南山大学のキャンパス整備に関する公式の見解を示すものではない。「建築ストック」の活用により、後世にキャンパスの風景を継承しながら、快適な教育・研究環境を実現させる可能性について、日本のモダニズム建築の保存・再生の現状を視野に入れながら、資料の活用を重視する文化資源学的な観点から考察するものである。

研究の方法として、まずは、アントニン・レーモンドの建築およびレーモンドにより設計された南山大学の建築の歴史的・文化的価値について、レーモンドの自伝や当時の建築雑誌、本学の教職員による論文等の多様な文献からまとめてみたい。また、南山大学と同時期に建てられたモダニズム建築の中で、建物が保存・再生されている事例を取り上げ、「建築ストック」活用の実態を探る。

## 一 レーモンド設計による南山大学の建築について

### (一) アントニン・レーモンドの建築について

建築家・アントニン・レーモンド (Antonin Raymond 一八八八—一九七六) は、ボヘミア地方グラドノ (現在のチェコ共和国) の出身であり、一九一九年にフランク・ロイド・ライトの助手として、帝国ホテル建築のために来日して以来、一九三七年までの一八年間、さらにアジア・太平洋戦争を挟んで一九四六年から一九七三年までの二六年間、合わせて五〇年近くも日本において活動し、日本のモダニズム建築を牽引した。吉村順三や前川國男ら、日本を代表する建築家たちから師と仰がれる存在となり、まさに「日本のモダニズム建築の父」と呼ぶのに相応しい。代表作に「東京女子大学総合計画 (一九二二年)」、「霊南坂の自邸 (一九二四年)」、「東京ゴルフクラブ (一九三〇年)」、「リーダーズ・ダイジェスト東京支社 (一九四九年)」、「群馬音楽センター (一九五八年)」等、鉄筋コンクリート造の構造を生かした実用的で美しい建築の他、「夏の家 (一九三三年 現ペイネ美術館)」、「麻布の自邸 (一九五一年)」、「新発田カトリック教会 (一九六五年)」等、「錠状トラス」「レーモンド・スタイル」と呼ばれる丸太材をそのまま生かした構造による、簡素でありながら温かみのある木造建築が挙げられる。また、レーモンドの建築において注目すべきは、妻のノエミ・レーモンドの存在である。ノエミはインテリア・デザイナーとして、日本の伝統的な空間や、暮らしの中に生きる美を深く理解し、夫の設計した建物の内装や家具の多くを手掛けた。南山大学の建築においても、床のパターンや家具はノエミのデザインであり、簡素で美しい木製ベンチなどが四〇年以上経った現在も大切に使い続けられている。

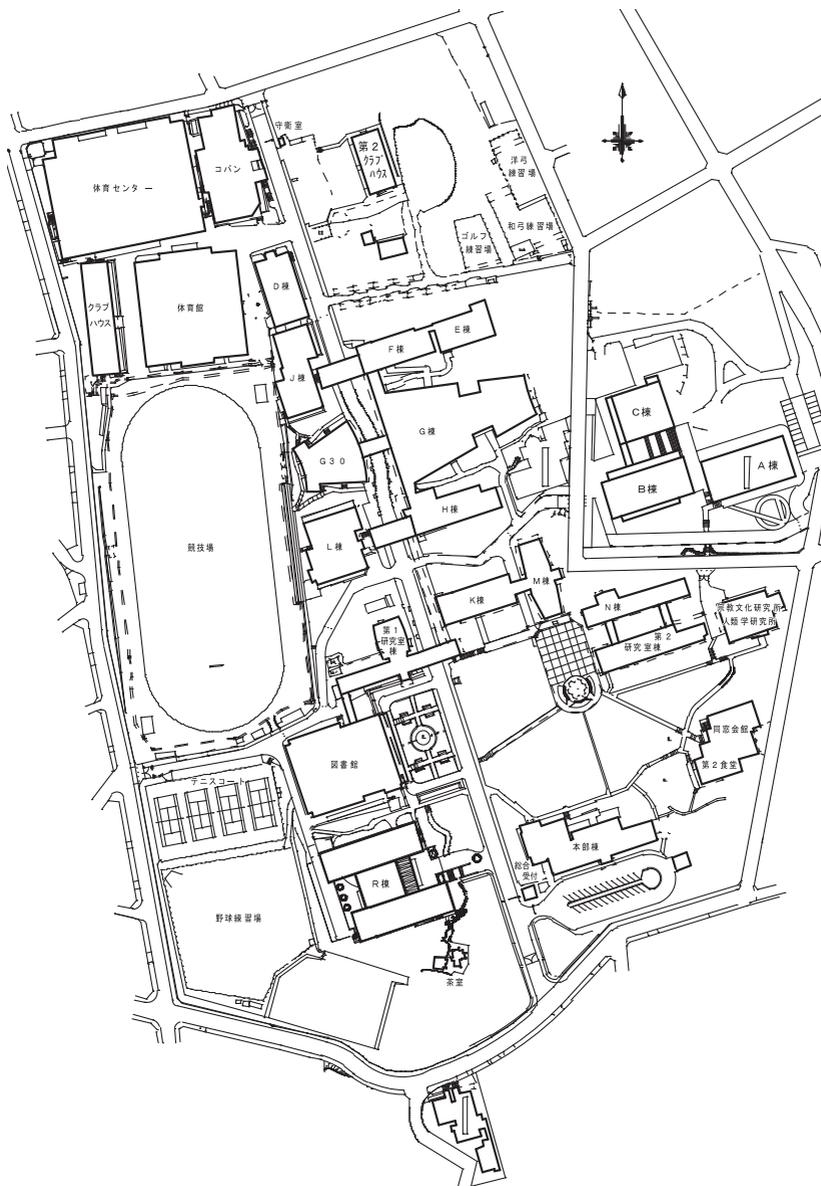


図1 南山大学名古屋キャンパス平面図（2011年3月現在）

## (二) 南山大学の建築の特徴

ひとりの建築家が、日本の大学のキャンパス総合計画を完成させたという事例は非常に少ない。レーモンドの初期の代表作である「東京女子大学」において、一九二一年に着手した総合計画は、計画第三期のチャペルの完成までに一五年以上を費やしたものの、学生寮の半分と管理棟を残し、途中で挫折することとなった。その後、一九五八年には「国際基督教大学」の総合計画に携わるものの、先任の建築家が残したとされる無秩序な計画との格闘の末、レーモンド自身は図書館のみを手がけるに留まったとされる。しかし、レーモンドは、再び日本の大学の総合計画に携わる機会に恵まれた。カトリック神言修道会のゲハルト・シュライバー神父（南山学園理事長）をはじめとする会員たちとの交流から、名古屋の南山大学の総合計画に取り組むこととなる。一九六四年の第一期において、研究棟、教室棟、図書館、食堂等の八棟の建物を、第二期の一九六八年に体育館とクラブハウスを完成させ、ついにレーモンドの念願である自身による大学総合計画が実現することとなる。

南山大学の総合計画においては、自然のままの地形を生かし、敷地内の草木をできる限り残すことが徹底された。敷地内に尾根のように続いていたという細い道は、キャンパスの敷地計画の基本となり、その道路を基軸として、建物や屋外施設が巧妙なバランスを保ちながらも、ダイナミックに配置された。現在もキャンパス内を南北に貫く道路は、「メインストリート」の愛称で親しまれている。現在、キャンパスは公道を隔てた八雲町まで拡張し、建物の数も、大小合わせて三〇棟近くまで増えたが、レーモンドによって残された「メインストリート」を基軸とするキャンパスの構成は継承されている（図1）。

また、建物の特徴としては、レーモンドの得意とするコンクリート打放し仕上げ、プレキャストコンクリート（事前に成形された部材）によるルーバー（図2、図3）、象徴的な「赤茶色」の塗装が挙げられる。「杉板本実枠コン



図2 図書館（左）と第一研究室棟（右）



図3 日照の方角に配慮されたコンクリートルーバー(図書館)

クリート打放し<sup>(3)</sup>」による木目の転写模様は、建物外観だけでなく、内装においても露出したコンクリート梁等に現れ、ベニヤの簡素な内壁とのコントラストが美しい。また、「赤茶色」の外壁塗装については、レーモンド自身が、この敷地の粘土質の赤土をイメージして選んだとされるエピソードが残されている<sup>(5)</sup>。レーモンド建築以降、建物の工法は変化してきたものの、コンクリート打放し仕上げと「赤茶色」の塗装のコントラストによる建物外観は、キャンパス計画の規範となっている。

南山大学はレーモンドの円熟期の傑作、そして日本のモダニズム建築の中の重要な作品として、建築設計や建築史の専門家から非常に高い評価を得ている。竣工当時の一九六四年度には、自然のままの地形と機能的な校舎群との調和が高く評価され、日本建築学会賞を受賞した。受賞時の講評には、「高価な仕上材の美しさや特異な構造体の奇抜さに頼ることなく、与えられた自然との調和と機能的な校舎群との結びつきのなから、これまでに見られなかった大学校舎群の新しい空間的秩序を創造したことは高く評価されなければならない<sup>(7)</sup>」とある。また、近年では、レーモンドによるマスタープランを継承しながら、建物の日常的なメンテナンスがなされている点が評価され、既存建物の保全を表彰するBELCA賞ロングライフ部門賞（第一二回二〇〇二年度）にも選ばれた。しかし、残念ながら、日々キャンパスで学ぶ在学生や卒業生、このキャンパスを職場とする教員や職員たちのレーモンド建築の認知度は決して高いとは言えないのが現状である。ひとつの理由として、キャンパスの中に象徴的な建物が存在していないということが考えられる。キャンパス内に時計台や講堂等、キャンパスのシンボルとなる建物が存在し、それらがある著名な建築家の作品であるとすれば、誰もが認識するだろう。しかし、レーモンドの自伝に「平凡などこにでもある、退屈で、無意味な、広場の偽記念性とか、列柱、広い階段、その他の高価な装飾など、世界中はほすべての大学にあるものはやめた<sup>(8)</sup>」とあるように、南山大学の計画においては、構造そのものが唯一の装飾とさ

え言える機能的な建物が、自然の地形を生かして配置されているのみである。レーモンドが「自然を基本として」造りあげた緑豊かなキャンパス、その美しさと心地良さは、学生、教職員に十分共有されているだろう。その設計者が誰であるかを意識させないほどに、自然にキャンパスは広がっている。しかし、そのキャンパスが持つモダニズム建築としての文化的・歴史的価値が認識されていないというのは残念でならない。レーモンド建築の文化的・歴史的価値は、南山大学におけるキャンパス整備計画だけでなく、大学の広報においても、注目すべき点であるにも関わらず、学内でのレーモンド建築の位置づけは明確にされていない。

## 二 モダニズム建築における保存と活用の事例研究

ここでは、モダニズム建築が活用されている良い例として、他大学のキャンパス整備や公共建築の保存・再生の事例を取り上げてみたい。

### (一) 事例一…名古屋大学豊田講堂（名古屋市千種区）

名古屋大学の東山キャンパスは、南山大学名古屋キャンパスのすぐ隣に位置し、緑豊かな約七〇〇〇〇㎡（南山大学名古屋キャンパスの約五倍）にも及ぶ広大なキャンパスである。キャンパス内のほぼ中央に位置する「グリーンベルト」と呼ばれる緑地帯は、東山の丘陵を抜ける山手・四谷通とともに、名古屋市の都市景観形成地区にも指定されている。その「グリーンベルト」の一端、西面に広がる市街地を一望できる所に位置するのが、名古屋大学のシンボルである豊田講堂である。豊田講堂は、建築家・楨文彦の処女作として、一九六〇年に設計された。

一九六二年には日本建築学会賞を受賞、一九九三年には名古屋市の都市景観重要建築物の指定も受けている。また、前述のとおり、日本のモダニズム建築を語るうえで重要な建物であり、DOCOMOMO Japan による「DOCOMOMO 一〇〇選」にも選定されている。豊田講堂は、竣工以来、入学式や卒業式、各種学会、シンポジウム等、教育・研究の場として活用されてきた。楨が「この建物は大学の門であるということ」で設計した<sup>(10)</sup>と意図した通り、建物前の広場を含め、東山キャンパスの象徴的な空間を形成してきた(図4)。

竣工から四五年、建物の老朽化が進行する中、トヨタ自動車グループ各社の寄附を受け、世界的な建築家となった楨自身が再び自分の作品の設計を担当するという形で、二〇〇七年に大規模な改修と増築が完了した。事前調査と基本計画を含めると、完成までに実に三年間<sup>(11)</sup>という壮大なプロジェクトである。改修の基本方針として、「意匠の保存・継承」が掲げられ、名古屋大学のシンボルとして、文化遺産としてのモダニズム建築の意匠を保存・継承することを目標とした。

#### 外観の復元

建物外観については、モダニズム建築の特徴のひとつである「杉板本実枠コンクリート打放し」の意匠性を再生することが試みられた。長年の風雨による壁面の劣化度を細かく調査し、劣化の進行具合に応じて、「打増工法」(既存の壁面を削ったうえで、薄くコンクリートを打ち増す)と「補修仕上げ」(補修により表面の本実型枠の表情を再生する)のどちらかを選択し、オリジナルの意匠性を復元している(図5)。また、コンクリート打放し面の汚れや劣化防止対策として、フッ素系塗膜や光触媒コートを施すことで、今後の維持・保全の性能を向上させている。

#### ホール性能の改善

大学のシンボルとなる講堂として、式典からコンサートまで幅広い用途に対応することができるよう、ホールと



図4 名古屋大学豊田講堂



図5 復元されたコンクリートの意匠

しての性能の改善が図られた。具体的には、「座席」、「空調」、「音響」、「照明」の四点である。座席の改善としては、既設の固定椅子の座面と背板をリユースしながら、座席の肘中の拡張（四五〇ミリ↓五五〇ミリ）、座席の前後間隔の拡張（九〇〇ミリ↓九八〇ミリ）を行った。一席あたりのスペースを広げることで、座席数は減少（一六〇〇席↓一二〇〇席）したが、快適性は大幅に向上した。また、学会、授業等での利用が多い一階席には、ノートパソコンの利用を想定し、各席に収納式テーブル、LAN端子、電源を設置した。空調については、吹出口を一階席の床に増設することで、講堂内の温度分布を均一化させるとともに、「全体空調」から「居住域空調」に転換し、省エネルギーを実現させている。また、音響については、式典や講演会での明瞭度の向上、クラシックコンサートにも対応できる残響時間を確保するために、スピーカーシステムの一新、舞台音響可変装置としてのルーバー壁や舞台幕を設置した。さらに、照明設備についても、式典、コンサートの講演会、ガイダンス等の様々なシーンを設定できるシステムとしたことで、ホールとしての可能性が大幅に広がった。また、講堂の夜間照明（ライトアップ）も計画され、大学のシンボルとしての存在感を引き立たせた。

#### アトリウムの増設等

豊田講堂と東隣に位置する「シンポジオン」<sup>12)</sup>との間の中庭スペースにアトリウムを増設（延床面積八四二㎡）すること、両建物を一体化させた。アトリウムは、ミニコンサート、ギャラリー、展示会の他、入学式等の式典時の保護者席の設置場所等、フレキシブルに活用できるスペースとして考えられている。また、講堂の前庭（四〇〇〇㎡）のコンクリート舗装の全面改修、コンクリート製のステージ、ベンチの補修が施された。

#### キャンパスマスタープラン

名古屋大学豊田講堂の事例のまとめとして、二〇一〇年三月に発表された「名古屋大学キャンパスマスタープラ

ン二〇一〇」において、豊田講堂の改修がキャンパス整備の中でどのように位置づけられているかを検証したい。「名古屋大学キャンパスマスタープラン二〇一〇」の中で、名古屋大学が創立一〇〇周年を迎える三〇年後に向けた長期ビジョン「フレームワークプラン」のひとつとして、キャンパス整備における「保存建物」を定めている。豊田講堂の他に、「古川記念館」、「野依学術交流記念館」、「赤崎記念館」等の記念建物・寄付建物は三〇年後も保存されるべき建物とされている。また、豊田講堂は古川記念館とともに、名古屋大学の持つ優れた建築資産として、キャンパス整備における建築デザインの規範として継承してゆくことが示されており、モダニズム建築としての文化的価値が大切にされていることがうかがえる。また、「名古屋大学キャンパスマスタープラン二〇一〇」の中では、キャンパスの持つ「ブランディング」としての経営効率だけでは判断できない価値についても定義されていることにも注目したい。「学生にとつては青春時代を過ごす原風景となり、教職員にとつては品格が高く誇りを持つて居るキャンパスであり、来訪者や地域の人々にとつては、都市における人間性回復の場として愛着を持つて接することができるキャンパスであることが、国内外を問わず、大学のイメージ向上につながる」とされていることからも、豊田講堂の改修プロジェクトが名古屋大学のブランディングに果たす役割は大きいと言える。

## (二) 事例二… 国際文化会館（東京都港区六本木）

国際文化会館の敷地は、六本木の繁華街の程近く、鳥居坂に面した高台に位置し、古くは江戸時代の武家屋敷、明治時代以降は度々所有者が変わり、政治家の井上馨、実業家の赤星鉄馬、岩崎小彌太らの邸宅も建てられてきた。岩崎邸は震災により焼失したが、京都の造園家「植治（うえじ）」こと、七代目小川治兵衛が手がけた庭園は、現在も継承され、二〇〇五年には港区の名勝に登録されている。国際文化会館の本館は、日本と世界の国々との親交



図6 国際文化会館の建物と庭園の調和（写真提供：国際文化会館）

を深めることを目標とし、ロックフェラー財団をはじめとする国内外の諸団体の支援で設立された財団法人国際文化会館により、一九五五年に建てられた。設計者の選定にあたっては、レーモンドやヴォーリズ<sup>〔6〕</sup>による設計案もあつたようだが、最終的には、前川國男、坂倉準三、吉村順三という新進気鋭の若手建築家三人の共同設計という、日本の近代建築史の中でも非常に珍しい形が取られた。竣工の翌年の一九五六年には、日本建築学会賞を受賞しており、モダニズム建築を代表する建物のひとつである。緑豊かな環境は、都会の中のアアシスとして、日本と世界の人々の知的交流の場として、会員のみならず、多くの研究者や文化人にも愛されてきた（図6）。

解体の危機から保存・再生へ ―日本建築学会からの提案―

偉大な三人の建築家による共同作品も、竣工から五〇年も経過しないうちに、他の多くのモダニズム建築と同じように、解体か保存かの選択を迫られることとなる。建物や設備の老朽化、会員の減少、会館の宿泊利用者の減少等により、一九九〇年代後半から、国際文化会館の経営状況が悪化していく。その打開策として、二〇〇一年頃から動き出した鳥居坂地区の再開発計画において、国際文化会館の土地を空中権（土地の上に作れる建物の容積率の権利）とともにデベロッ

パーに売却することが検討され始める。そして、二〇〇三年頃、建物を解体し、新築する方針が打ち出され、その動きに対して、日本建築学会（AJJ）、日本建築家協会（JIA）から、それぞれ保存要望書が提出された。翌年の二〇〇四年には DOCOMOMO Japan から保存要望書が提出されている。こういった保存運動も空しく、解体されてしまうのが多くのモダニズム建築が辿った運命でもあったが、国際文化会館の場合は様子が違った。日本建築学会からの保存要望書への回答として、国際文化会館の代表者である高垣佑理事長は、二〇〇四年七月、同学会に對し、庭園を原型のまま残す形での建物の改修計画に専門家としてのアドバイスを求めたのである。これを受け、学会内には急遽「国際文化会館保存再生計画検討特別委員会」が立ち上げられ、建物の解体建替の代替案の検討に入った。現状の本館建物の耐震強度の診断（診断の結果、現行の耐震基準に満たないことが分かる）と工法（耐震あるいは免震）の検討、一九七〇年代に増築された新館の建替の可能性の検討、工事費の概算等の膨大な作業を行い、最終的に「本館を免震により再生、建物を活かして新館を建て替える」という代替案を提案した。それに対して、会館側は、「一、建物の閉鎖期間が短い、二、移転費がかからない、三、工事費が安い」ことを評価し、代替案を採用したのである。こうして、国際文化会館は、解体・新築の決定から一転、保存・再生されることとなった。二〇〇五年五月末に着工、保存・再生のメリットが生かされ、二〇〇六年四月、わずか一年間の閉鎖期間の後に再オープンしている。二〇〇六年八月には、国の「登録有形文化財」に登録された。また、モダニズム建築の再生・活用の取り組みが高く評価され、BELCA賞ベストリフォーム部門賞（第一七回二〇〇七年度）、グッドデザイン賞（二〇〇七年度建築・環境デザイン部門）、そして日本建築学会賞（二〇〇七年度業績部門）にも選ばれている。五〇歳の建築を一〇〇歳にするために

ここで、国際文化会館の保存・再生計画の概要についてまとめた。建築諮問委員会に設けられたワーキング・

グループにおいては、「『保存のための再生でなく再生のための保存』を基本方針とし、建替と同等以上のしつかりした機能と耐久性能の向上が目指され、これからの五〇年間の活用のための詳細計画」<sup>(17)</sup>が慎重に検討された結果、次のようなものが実施された。

- (一) 耐震壁の設置…一〇〇歳建築に値するIS値〇・七五<sup>(18)</sup>を目指し、機能的に支障のない位置に設置。
- (二) 宿泊室の機能更新…全室にユニット・バスを設置。三階の中廊下を廃止し、全室が庭に面した構成に改修。
- (三) 地下会議室の改修…会議室の奥行を一・四メートル拡幅。天井の格子梁の内装を再現。
- (四) ホールの新設…旧樺山ルームを撤去し、二層吹抜、二〇〇名規模のホールを新設。
- (五) エントランスの拡幅…従来のエントランス空間構成を継承しつつ、多数の来館者に対応できるよう拡幅。
- (六) 外装の改修…コンクリート面の補修。既存の木製サッシの再生活用。

国際文化会館の事例で注目すべきは、モダニズム建築を「積極的に使う」前提で保存・再生している点である。建物の保存と言えば、従来は、建物の「オーセンティシティ（原形のままであること）」を基本とし、竣工時の姿に戻す「凍結保存」の考え方が一般的であった。この考え方は、洋館等の建築、いわゆる装飾的な「様式建築」の保存には当てはまるが、モダニズム建築の保存には無理が生じやすい。国際文化会館の保存・再生プロジェクトに設計者としても関わった建築家・小林正美（明治大学教授、アルキメディア設計研究所主宰）は次のように述べている。

「モダニズム建築は、ある用途のために一対一の対応で空間がつくられている。だから、時代遅れになると空間

の意味が薄れて、壊されてしまう。思い切って手を加えることを考えていかないと、様式建築と同じ方法では残せない<sup>(19)</sup>。」

様式建築の場合は、建物の外観であれ内装であれ、その「装飾」をどのように保存・再生するかが、計画の中心となる。一方、モダニズム建築の場合、機能主義から生まれた空間、換言すれば、レーモンドの建築に見られるような「装飾を廃した建築」のどの部分を継承し、再生していくかが難しい課題となるのである。建物の所有者や実際に使用する側の意向を考慮し、建物を使い続けるために必要な機能を更新しつつも、その空間の価値を損なわないこと、改修や用途変更を施しながら残していく、「動態保存」の考え方が必要となるのである。従来、建物の保存と言えば、建物の所有者に価値をアピールしたり、署名活動や集会によりメディアに訴えるような方法が一般的であった。しかし、保存の対象が、様式建築からモダニズム建築に拡大していくにあたり、今後は「活用提案型」の保存が主流となっていくかなければならない。国際文化会館のケースのように、日本建築学会に代表される専門家が、建物の所有者に対して、「建物は変えられない」ということを示し、今後の事業計画にまで踏み込んだ思い切った再生プランの提案を行っていくことが成功の鍵となる。

#### 登録有形文化財制度

国際文化会館の事例のまとめとして、建物を変えながら残す「動態保存」を支える制度として注目すべき「登録有形文化財制度」について取り上げてみたい。この「登録有形文化財制度」は、国の重要文化財制度を補完する仕組みとして、文化庁により、一九九六年に創設された。従来の文化財保護政策が、「重要文化財には、釘一本打でない」と言われるほど「保存」に傾斜し過ぎていたことへの反省から、文化財の活用を促進する方向に方針が転換されてきたことが制度創設の背景である。従来の国や地方公共団体からの「指定制」による文化財保護とは異なり、建物

の所有者からの「届出制」により、文化財として登録し、その保存と活用が図られる制度である。身近な文化財を守り、地域の資産として活かしていくことを目的とし、公共建築だけでなく、住宅や店舗、工場、橋、ダム、トンネル、その他にも、煙突、石垣、火の見櫓等、幅広い種類の建造物が対象とされている。

登録の大原則は、「建設後五〇年を経過」とされており、モダニズム建築の中でも比較的新しいものも登録対象となることは注目すべき点である。また、登録基準として、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」、「造形の規範となっているもの」、「再現することが容易でないもの」とあるが、いずれも DOCOMOMO Japan の活動に象徴されるような、モダニズム建築保存の目的にも合致していると言える（表1、表2）。

また、登録された文化財への規制も緩やかであり、外観が大きく変わるような場合を除いては、国（文化庁）への届出をする必要がない。所有者の判断で、設備の変更（窓、屋根の材料等）、新たな設備の追加（雨樋、空調、駐車場等）等の改修を自由に行うことができる。また、文化財の管理や修理について、文化庁に技術的なアドバイスを求めることも可能である。

その他、登録有形文化財に対する財政的な優遇措置としては、次のようなものがある。重要文化財に比べれば、優遇幅は小さいが、文化財を保存・活用するための支援策としては重要である。

- (一) 保存・活用するために必要な修理の設計管理費の二分の一を国が補助
- (二) 敷地の地価税を二分の一に減税
- (三) 家屋の固定資産税を二分の一に減税（地方税）
- (四) 相続財産評価額を一〇分の三控除（国税庁通達）

|             | 登録有形文化財   | 重要文化財（建造物）  |
|-------------|---|---|
| 制度の目的と保護の対象 | 所有者による自主的な保護を促進し、幅広い文化財保護の実効を図るための糸口を確保する。<br>有形文化財建造物のうちその文化財としての価値にかんがみ保存および活用のための措置が特に必要とされるものを対象とする。  | 永久的な保護を目的とする制度であり、強い規制と手厚い保護によりこれを担保している。<br>有形文化財のうち重要なもの（各時代または類型の典型となるものとして厳選されたもの）を対象とする。   |
| 基準          | 建築物、土木建造物およびその他の工作物（重要文化財および文化財保護法第98条第2項に規定する指定を地方公共団体が行っているものを除く。）のうち、原則として建設後50年を経過し、かつ、次の各号の一に該当するもの<br>i) 国土の歴史的景観に寄与しているもの<br>ii) 造形の規範となっているもの<br>iii) 再現するのが容易でないもの | 重要文化財……建築物、土木構造物およびその他の工作物のうち、次の各号の一に該当し、かつ、各時代または類型の典型となるもの<br>i) 意匠的に優秀なもの<br>ii) 技術的に優秀なもの<br>iii) 歴史的価値の高いもの<br>iv) 学術的価値の高いもの<br>v) 流派的または地方的特色において顕著なもの |

表1 登録有形文化財と国指定重要文化財の制度比較

| 基準    | 建設後 50 年を経過している建造物で                         |   |   |
|-------|---|---|---|
|       | 国土の歴史的景観に寄与しているもの                           | 造形の規範となっているもの   | 再現することが容易でないもの                          |
| 具体的な例 | 特別な愛称等で、広く親しまれている場合<br>例) ○○○の洋館            | デザインが優れている場合<br>例) ○○様式の教会  | 優れた技術や技能が用いられている場合<br>例) なまこ壁の住宅        |
|       | その土地を知るのに役立つ場合<br>例) 地名の由来となった建造物 (○<br>○橋) | 著名な設計者や施工者が関わった場合<br>例) 建築家○○の作品  | 現在では珍しくなった技術や技能が用いられている場合<br>例) 黒漆喰塗の町屋 |
|       | 絵画等の芸術作品に登場する場合<br>例) 文学、映画、歌謡曲に登場するもの      | 後に数多く造られるものの初期の作品<br>例) 昭和初期のモダニズム建築<br><br>時代や建造物の種類の特徴を示す場合<br>例) 茅葺屋根の農家 | 珍しい形やデザインで、他に同じ様な例が少ない場合                |

表 2 登録有形文化財に該当する建造物の基準

文化庁の報告によると、登録有形文化財は、二〇一〇年七月現在で、七九八六件（三二五〇箇所）の登録数がある。そのうち、種類別で「学校」は二五二件となっている。例えば、有名な建物では「安田講堂」の名で知られる東京大学大講堂（一九二五年）、前述の東京女子大学のレーモンド建築、同志社大学アーモスト館（一九三二年）や関西学院大学時計台（一九二九年）等のヴォーリズによる様式建築も含まれている。各大学の Web ページを見ても、文化的価値を認められたその建物は、美しいキャンパスの象徴、誇りとして紹介されている。

### 三 現状と課題

ここで、南山大学のキャンパス整備についての現状と、キャンパス整備のひとつの可能性としてレーモンド建築を「建築ストック」として活用するための課題を整理したい。

#### キャンパスマスタープランについて

まず、南山大学のキャンパス整備における問題点として、「キャンパスマスタープラン」と呼べる中長期的な計画が学内で共有されていないことを挙げておきたい。

二〇〇七年三月、ハンス ユーゲン・マルクス学長（現南山学園理事長）より、ミカエル・カルマノ南山学園理事長（現南山大学長）に提出された「南山大学における『二〇年後の将来像』について（最終報告）」の中で、キャンパス整備に関する中長期計画の概要が示されている。将来構想委員会の下に設置された「南山大学グランドデ

ザイン検討ワーキング・グループ」によって作成されたこの「二〇年後の将来像」（以下グラランドデザイン）の計画では、今後二〇年を三期に分け、第二期「展開・発展期（二〇一四年～二〇二〇年）」において、キャンパス整備を実現させるとしている。現行の委員会組織としては、「キャンパス整備計画委員会（事務局・学長室）」、「体育施設管理運営委員会（事務局・施設課）」等があるが、教育・研究活動に関わる当面の課題についての検討が中心となり、グラランドデザインを具体的なキャンパス整備に展開させるための組織として十分機能しているとは言えない。

また、毎年六月に予算編成の基礎資料として施設課において作成する五年間の修繕計画（一般修繕、防水工事、空調の三つの項目）および一〇年間の事業計画（一〇〇〇万円以上の修繕事業）についても、グラランドデザインを十分視野に入れて作成されていないのが現状である。大学の経営の観点からも、修繕計画や事業計画においては、建物の外壁や屋上の防水工事、省エネルギー対策の空調機器の更新等、当面の必要最低限の修繕が優先される。現状では、レーモンド建築を建築資産として積極的に活用するような新規事業を取り入れていくことは難しく、老朽化した建物を「活かさず、壊さず」の修繕を繰り返している状況が続いている。

二〇一〇年度の学長方針の中において、「V. キャンパス整備」の項目には、「今後、各キャンパス（名古屋キャンパス、瀬戸キャンパス）のあり方を検討していく」と明示されている。名古屋キャンパスの整備においては、レーモンド建築を竣工五〇年で解体し、建替えていくのではなく、グラランドデザインで示された「新たな価値の創造」というビジョンの実現のためにも、次の五〇年に向けて、全学的に共有できる「キャンパスマスタープラン」を策定し、「建築ストック」としてレーモンド建築を活用しながら、保存・再生していくことが望まれる。

#### 四 提言

本稿のまとめとして、南山大学の第一期のレーモンド建築のひとつである六〇〇人教室「G 30教室」の保存・再生を「建築ストック」活用の可能性として提言したい。

##### 普段着の中ホールとして

二〇一一年三月竣工のR棟には、最新の視聴覚機器や照明設備を完備した「フラッテンホール」（五〇〇人収容）が用意される。老朽化が著しいG 30教室は、名古屋キャンパスで最大の収容人数を誇る施設としての役割を終えることが暗黙の了解となりつつある。しかし、日常の授業以外に、各種の行事、学生の課外活動、予備校の模擬試験や資格試験等の外部への貸出には、依然として、キャンパスのほぼ中央に位置し、他の教室棟とのアクセスが良いG 30教室の需要は高い。二〇〇九年度の使用状況を調査したところ、各種ガイダンス、学生主体の企画、学内の講演会等、学内行事での使用頻度が高く、この教室の持つ「普段着の中ホール」としての重要な役割が浮び上がった。この役割に着目し、名古屋大学豊田講堂の事例のように、空調や音響設備の改善等の機能更新を行い、「大教室」から「中ホール」としての新たな価値の創造を目指す。新しいR棟のフラッテンホールは、式典や学会等、「よそ行き」のホールとして、G 30教室は、学内の行事に気軽に使える「普段着のホール」として使い分けることで、キャンパスの持つ可能性の広がり期待できる。

##### その後続くキャンパス整備の指針として

G 30教室に象徴される低層の建物とメインストリートにより構成される風景は、レーモンドが描いた山里町キャ

ンパス（現在の名古屋キャンパス）の敷地計画の基本として、今後のキャンパス整備においても継承されるべきものである（図7）。「名古屋大学キャンパスマスタープラン二〇一〇」において、豊田講堂をはじめとする「保存建物」が指定されていたように、南山大学においては、メインストリートとレーモンド建築によって生み出される風景の保存を、キャンパス整備の指針とすることが望ましい。メインストリートと高さを抑えた建物で構成される空間は、南山大学特有の「建築ストック」としての活用の可能性も高い。キャンパスの南北を貫くメインストリートは、G30教室の前で非常に緩やかな弧を描いている。このことは、この大教室の前をただ通り過ぎるのではない「たまり場的な空間と考えたレーモンドの意図が窺える。例えば、G30教室ロビーの入口を改修し、大きな開口部を設けて、メインストリートと連続した「半屋外」のオープンスペースを生み出すことができれば、学生たちの憩いの場、各種行事の受付や本部としての機能、展示スペース等の可能性も広がる（図8）。また、老朽化が著しいG30教室ロビーのトイレを、モダンできれいなトイレに改修し、学生が立ち寄りたくなるキャンパスの中のアシス的な空間作りを目指すことも学生サービスの観点からは効果がある。モダニズム建築を変えながら残す「動態保存」により、学生や教職員の心象風景を継承しながら、快適で質の高い教育・研究環境を生み出していく取組みが必要である。

#### ブランドディングプロジェクトとして

キャンパス内に建築家・アントニン・レーモンドの作品が数多く存在する、言い換えれば、キャンパスの総合計画そのものがモダニズム建築の傑作であることは、南山大学の「強み」であり、「ブランドディング」としての価値、すなわち、経営効率だけでは判断できない価値を十分に持っている。G30教室の保存・再生をきっかけに、名古屋キャンパス内のレーモンド建築の竣工五〇年を目的に、順次「登録有形文化財」に登録することができれば、それは目に見える建築の評価となり、南山大学のブランドとして、戦略広報、入試広報への展開等、「外」に向けての



図7 低層のG30教室と「メインストリート」で構成される風景



図8 G30教室ロビー入口

効果だけでなく、在学生、教職員のレーモンド建築に対する認知度向上という「内」に向けての効果も大いに期待できる。在学生・教職員たちに広くレーモンド建築を知ってもらうためには、「登録有形文化財」への登録という制度の活用だけではなく、日常的な学内の取組が重要である。特に在学生にとっては、「自校史教育」の観点においても、自分が学ぶキャンパスの成り立ちを知ることが大切であるし、普段何気なく過ごしているキャンパスが、実はモダニズム建築の傑作であることを知らないのは非常に残念である。現状では、大学の公式 Web ページにレーモンド建築を紹介するページが設けられているのみであるが、新たな試みとして「学生生活案内」等、在学生に配付される資料にレーモンド建築について掲載する等の情報発信が必要である。また、大学史料室や学長室等の主導により、キャンパス内のレーモンド建築に焦点を当てたアカデミックな印刷物（写真集やリーフレット）の刊行等、年史編纂も視野に入れて、ワーキング・グループ等で時間をかけて取り組んでいくことも必要である。

## おわりに

本稿では、日本のモダニズム建築絶滅の危機という問題を、大学における一九五〇年代から一九六〇年代に造られたキャンパス再編という側面から捉え、スクラップ・アンド・ビルドによらない建築の保存・再生の施策を提言した。南山大学においても、レーモンド建築という価値ある「建築ストック」を活用し、建物の「形」を残すだけの保存ではなく、新たな「活用提案型」の保存を実現させることができれば、日本のモダニズム建築保存にも少なからず貢献することができるだろう。

本稿のまとめとして、「建築ストック」の活用によるキャンパス整備を実現していくために残された課題を挙げ

ておきたい。まず、一点目の検討課題は資金計画である。本稿で取り上げた名古屋大学の「キャンパスマスタープラン」のように、全学的な総意に基づいて、守るべきものを「保存建物」として明確にし、中長期計画の中で予算を投じていけるかどうか。豊田講堂の保存・再生のケースでは、トヨタ自動車グループ各社からの寄付を得たことで、必要十分な建物・設備の改修を行うことができた。財源として、寄付金や補助金を活用することは検討に値する。また、国際文化会館の例では、解体・新築に比べて工事費用がかからないというメリットから、建物の保存・再生が実現したが、実際は、既存建物の構造や強度の調査費用、新築と同等、またはそれ以上の設計・管理費が発生することも忘れてはならない。その他、建物を普段通りに使いながらの改修ではなく、建物を閉鎖したうえでの大規模な改修工事となる場合は、それに伴う事務室の移転や臨時の教室確保等の措置も必要となり、その費用の捻出やスケジューリング調整の負担も大きくなるだろう。

また、二点目の検討課題としては、省エネルギー対策である。「建築ストック」の活用と省エネルギーをどのように考えるか。建物を壊し、膨大な産業廃棄物を排出することが地球環境に与える負荷は大きい。それに比べれば、建物を保存・再生することは地球に優しいと言えるかも知れない。しかし、古い建物の冷暖房効率の低さを空調機器稼働率を上げて補うのであれば、エネルギー使用量や二酸化炭素排出量を増加させてしまう。二〇一〇年四月の「エネルギーの使用の合理化に関する法律（省エネ法）」の改正により、省エネルギー推進はキャンパス整備において無視できない課題となっている。

三点目の課題として、レーモンド建築を「建築ストック」として活用していくために不可欠である専門家とのパートナーシップの構築である。名古屋大学豊田講堂の保存・再生においては、既存建物を設計した建築家自身が、再び改修プロジェクトを担当した。また、国際文化会館のケースでは、日本建築学会が会館側に対して、建物の価

値を十分に理解したうえで、事業計画にまで踏み込んだ大胆な保存・再生の提案を行うことができた。南山大学においても、レーモンド建築の価値を理解したうえで、「建築ストック」の活用を提案できるパートナーの存在が必要条件となるだろう。

本稿では、レーモンド建築の保存・再生を、キャンパス整備の手段としてだけではなく、大学の「ブランディング」のひとつと考えた。大学の「ブランディング」とは、在学生、卒業生、教員、職員が「誇り」を持てる大学づくりではないかと思う。二〇一〇年秋、南山大学附属小学校の行事で、一年生約一〇〇人が南山大学の中でオリエンテーリングを行った。オリエンテーリングを通じて、生徒たちが南山大学に親しみ、身近に感じてもらうことを目的とした企画である。チェックポイントのひとつであるG30教室では、小学校の教室と大学の教室の違いを見つけるという課題に取り組んだという。小学生たちは、もうすぐ五〇歳を迎えようとする大きな教室を見て何を感じたのだろうか。

「このキャンパスは、遠い国からやって来た『レーモンドおじさん』が造ってくれました」、子どもたちにそう語りかけ、それを誇れる大学でありたいと願う。

註

- (1) 一九二〇年代から一九六〇年代にかけて、機能性や合理性を重視して設計された建築。日本で活躍した代表的な建築家は、ル・コルビュジエ、その流れを受け継ぐ前川國男や丹下健三、南山大学を設計したアントニン・レーモンドやその弟子・吉村順三ら。洋館や赤レンガ倉庫等、幕末期、明治時代以降の様式建築に象徴される装飾的な「近代建築」との対比から、「モダニズム建築」の用語が使用される場合が多い。
- (2) 横河健「特殊な国ニッポンの特殊な建築保存事情」『東京人』一八八号、二〇〇三年、四五頁
- (3) 直訳すると、「モダン・ムーブメント」にかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織。一九八八年にオランダのアイントホーヘン工科大学のフーベルト・ヤン・ヘンケット教授の提唱により、設立された。建築史研究者、建築家、建築エンジニア、都市計画家、行政関係者等、幅広い分野の会員により構成されている。一九九〇年開催の第一回総会以降、拡大を続け、二〇〇三年までに世界四四カ国に支部が存在している。日本支部「DOCOMOMO Japan」は日本建築学会の建築歴史・意匠委員会の中に設けられたワーキング・グループを母体とし、二〇〇〇年ブラジリアで開催された総会において、正式に DOCOMOMO のメンバーとして承認された。
- (4) 既存建築を社会のストック（財産）と捉え、スクラップ・アンド・ビルドではなく、改修や用途変更（コンバージョン）により、建物を使い続ける「建築ストック」活用の試みは、近年、公共建築だけでなく住宅にも見られる。
- (5) コンクリート打設の際、型枠に杉板を用いることで、コンクリートの表面に木目が転写され、仕上げの表情が豊かになる。モダニズム建築のコンクリート打放しに良く見られる工法で、南山大学のレーモンドの建築の他、本稿で取り上げた名古屋大学豊田講堂や、国際文化会館にも採用されている。
- (6) 外壁の塗装色は、妻のノエミが選んだとされる説もある。
- (7) 日本建築学会「『日本建築学会賞』昭和三九年度の表彰業績に対する推薦理由」『建築雑誌』第八〇集九五七号、一九六五年、五五五頁
- (8) アントニン・レーモンド著・三沢浩訳『自伝アントニン・レーモンド（新装版）』鹿島出版会、二〇〇七年、二五八―二五九頁
- (9) アントニン・レーモンド「自然を基本として」『新建築』第三九巻第九号、新建築社、一九六四年、一一六頁
- (10) 栗田勇『現代日本建築家全集一九菊竹清訓、横文彦』三一書房、一九七一年、一二八頁
- (11) 二〇〇五年一月～二〇〇六年三月 事前調査・基本計画、

- 二〇〇六年四月～二〇〇六年一月 基本設計・実施設計、  
二〇〇六年二月～二〇〇八年一月 工事
- (12) 名古屋大学創立五〇周年の記念施設。ホール、レストラン、  
研究室等を備えた複合施設。一九九二年竣工。
- (13) 「名古屋大学キャンパスマスタープラン2010」国立大学法  
人名古屋大学、二〇一〇年、三二頁
- (14) ウィリアム・メレル・ヴォーリズ (William Merrell Vories  
一八八〇—一九六四)
- 日本で活躍した外国出身の建築家のひとり。大学の建築では、  
明治学院大学礼拝堂(一九一六年)、同志社大学アーモスト館  
(一九三二年)、関西学院大学(一九二九年)や神戸女学院大  
学(一九三三年)の建築群等、数々のミッションスクールの  
校舎の設計を手がけた。建築以外にも建材やオルガンの輸入、  
作詞作曲、出版や図書館の運営等の文化事業、結核診療所「近  
江診療院」の設立、メンソレータム(現メンターム)の販売  
でお馴染みの「近江兄弟社」の前身となる「近江セールズ」の  
創立等、その功績は多岐に渡る。
- (15) 最終的には、コストと工期の点から免震工法は困難と判断  
され、耐震工法が採用された。
- (16) 小林正美「国際文化会館の保存と再生」『国際文化会館会報』  
第一七卷第二号、二〇〇六年、二二頁
- (17) 小林正美、久米大二郎、鯉坂徹「国際文化会館本館の保存  
と再生について その二」『日本建築学会大会学術講演梗概  
集』二〇〇六年、一五九頁
- (18) 構造耐震指標 (Seismic Index of Structure)。建築物の耐震性  
能を数値化したもの。値が大きいほど耐震性能が高い。IS  
値〇.六以上は「大地震時に倒壊し、または崩壊する危険性  
が低い」とされている。逆に、IS値〇.三未満の建築物は「大  
地震時に倒壊し、または崩壊する危険性が高い」とされてい  
る。
- (19) 小林正美「展望 二一世紀型建築保存を考える」『日経アー  
キテクチュア』二〇〇九年八月二四日号

## 〔参考文献〕

柴田りつ、土居義岳「『モダニズム建築』という用語に関する研究」『日本建築学会九州支部研究報告』第四八号、  
二〇〇九年

亀井誠一編『カーサ・ブルータス特別編集 ニッポンのモダニズム建築一〇〇』マガジンハウスムック、二〇〇八

年

日本建築学会「『日本建築学会賞』昭和三九年度の表彰業績に対する推薦理由」『建築雑誌』第八〇集九五七号、一九六五年

『建築』一九六四年九月号、青銅社、一九六四年

『近代建築』第一八巻第九号、近代建築社、一九六四年

栗田勇『現代日本建築家全集—アントニン・レーモンド』三一書房、一九七一年

高橋洋子「『南山大学』と建築家アントニン・レーモンド—マスタープラン模型の復元にあたって—」『アルケイア—記録・情報・歴史—』第一号、二〇〇七年

加藤富美「アントニン・レーモンドと神言修道会の会員たち—南山大学山里校舍建築をめぐって—」『南山大学図書館紀要』第八号、二〇〇三年

吉田信之編『J A 三三三号アントニン・レーモンド』新建築社、一九九九年

南山大学 Web ページ「南山大学キャンパス・校舎探訪」<http://www.nanzan-u.ac.jp/> 二〇一一年一月一〇日アクセス

野沢英希、谷口元、恒川和久「コンパージョンによる建築ストックの利活用に関する研究—愛知県・岐阜県・三重県の学校建築を事例として—」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、二〇〇九年

饗庭伸「建築年に着目した地域における建築ストックの存在状況—ストック活用型都市計画の研究その二—」『日本建築学会大会学術講演梗概集』二〇〇九年

「名古屋大学キャンパスマスタープラン二〇一〇」国立大学法人名古屋大学、二〇一〇年

名古屋大学施設管理部 Web ページ掲載資料 <http://web-honbu.jinmu.nagoya-u.ac.jp/fnd/> 二〇一一年一月一〇日アクセス

楨総合計画事務所「名古屋大学豊田講堂改修計画」二〇〇八年

株式会社竹中工務店「名古屋大学豊田講堂改修・増築工事工事概要説明資料」二〇〇八年

国際文化会館リーフレット「ご利用のしおり」

小林正美、久米大二郎、鯉坂徹「国際文化会館本館の保存と再生について その一、その二」『日本建築学会大会学術講演梗概集』、二〇〇六年

小林正美「国際文化会館の保存と再生」『国際文化会館会報』第一七卷第二号、二〇〇六年二月

一粒社ヴォーリス建築事務所 Web ページ <http://www.vories.co.jp/> 二〇一一年一月一日アクセス

倉方俊輔「特集 慈しまれる? モダニズム建築」『モダニズム建築の保存』がもたらすもの―『JABS・建築雑誌』二〇〇八年二月号

兼松絃一郎「特集 慈しまれる? モダニズム建築―国際文化会館保存再生の成果と課題―」『JABS・建築雑誌』二〇〇八年二月号

本中眞「文化財保護をめぐる最近の動向―登録有形文化財の制度を中心として―」『ランドスケープ研究』六三(一)、一九九九年

文化庁 Web ページ <http://www.bunka.go.jp/> 二〇一一年一月一日アクセス

文化庁文化財部編著『総覧登録有形文化財建造物五〇〇〇』海路書院、二〇〇五年

〔付記〕

本稿執筆にあたり、国際文化会館から写真資料提供の協力をいただいた。ここで感謝の意を表したい。

Finally, from the analysis above, a specific proposal for conservation and utilization of “Room G30 (a room of 600 seating capacity)” is suggested as a conclusion.

# A Proposal for Conservation and Utilization of “Modernism Architecture”

ITO Shinji

## Abstract

Buildings of “modernism architecture” which were built in Japan from 1920 to 1960 are in danger of demolition today. Universities and colleges also follow this trend in the wave of management restructuring against the background of declining birth rate, and campus buildings are disappearing by means of “scrap and build,” regardless of the attachment of the students and the community.

This paper takes up the buildings of Nanzan University planned by Antonin Raymond ( completed in 1964; awarded the Prize of Architectural Institute of Japan), and makes a proposal to conserve and utilize them as “architectural stock” by repairing and converting the use, and not by “scrap and build.” The purpose of this proposal is to explore the possibilities of realizing appropriate educational and academic environment, through conserving the buildings and the campus scenery while utilizing the architectural property of “modernism architecture.”

The paper consists of 3 parts. First, it refers to the features of Nanzan University buildings planned by Raymond, and examine the value.

Second, it takes “Toyoda Auditorium of Nagoya University ( planned by MAKI Fumihiko,1960 )” and “ International House Building ( planned by MAEKAWA Kunio, SAKAKURA Junzo and YOSHIMURA Junzo, 1955 ) , ” which are built in the same period with Nanzan University, as examples of conservation and utilization of “modernism architecture,” and also introduce the remarkable system of registered tangible cultural property.